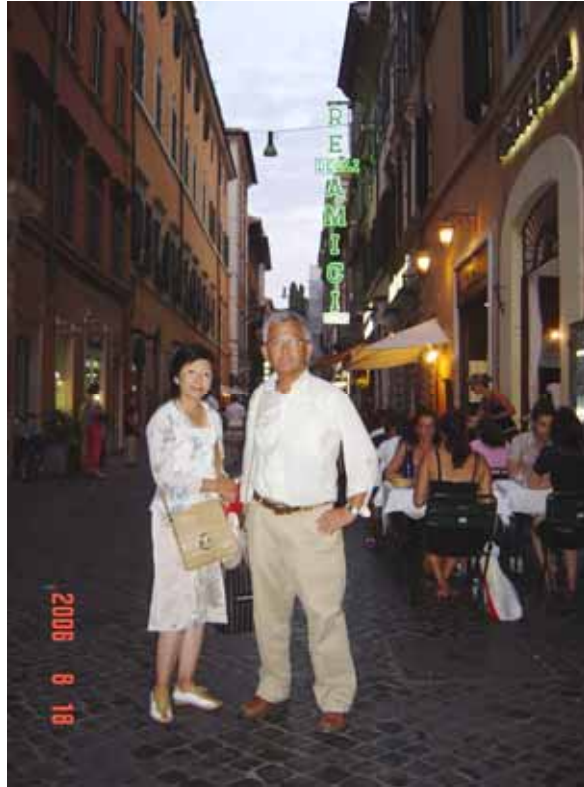


# イタリア紀行

## その3



ローマの街角にて

### ローマへの道（トスカーナの丘）

「トスカーナ」という言葉はなぜか美しい響きがある。

車窓からはトスカーナのなだらかな起伏をなす美しい景観が次から次へと展開される。糸杉が整然と並んでいる。青空と緑の草原に、中世の城や教会、石造りの村が美しく溶け合っている。放牧された牛たちの群れが見える。ひまわりの黄色が鮮やかに続いている。

トスカーナは、空から絵の具箱をまき散らしたような美しさである。



絵の具箱空からまくごと彩りてトスカーナの丘ローマへ続く

## 城壁都市オルビエート

ローマへの道の途中、大地から隆起した凝灰岩の自然の城壁に囲まれた天空都市オルビエートに立ち寄る。オルビエートの町に高くそびえ立つ岸壁は、何世紀にもわたってこの町を周囲の世界から切り離し、歴史、文化、遺跡を守ってきたという。



ケーブルカーで登り、少し歩くと壮大で美しい大聖堂（ドゥオモ）に出会う。この建物は、イタリアゴシック建築の宝石とも呼ばれているが、このように隔絶された町にかくも壮麗な教会を建築したこと事態が感動に値する。私の心を引いたのは、「アラバスタ」のステンドグラスである。アラバスタは大理石の種類で石膏雪花と訳されるが、このステンドグラスが教会内に幻想的な雰囲気を与えるのである。この日は晴れていたが、その光は、淡く暖かな安らかな祈りを祝福しているようであった。しかし、曇りや雨の日は、光を拒否するかのごとく荘重な暗闇の世界に一変させるという。

オルビエートはまた、陶器の町である。中世の重厚な建物が続く中に、意匠を凝らした店が並んでいる。妻は13世紀からの伝統をもつこの陶器がいたく気に入り、黄色の幾何学模様の鮮やかな皿を購入した。

## すべての道はローマに通ず (コロッセオ)

「すべての道はローマに通ず」、「永遠の都ローマ」である。

古代ローマ人も浴びたであろう燦々と輝く太陽を全身に受け、コロッセオの前に立つ。紀元80年に完成した円形競技場である。抜けるような青空に、不気味な4層の外壁がそびえ立っている。



ここでは、猛獣と剣闘士、剣闘士同士の闘いが繰り広げられ、ローマ市民は熱狂の渦に巻き込まれたという。1階の貴賓席、2階の一般市民席、3階の立ち見席を合わせて7万人以上を収容したという巨大なモニュメントである。これは、平和を愛したローマ人、いや、人間の内奥に潜む狂気と凶暴性の一面を象徴する建物でもある。

現在、このコロッセオでは、ファッションショーや野外オペラが上演されているという。漆黒の闇の中で、月明かりとライトに照らされたコロッセオはなにを語るのであろうかと考えた。

熱狂と狂気に揺れしコロッセオいま月光のもと平和を祈る

## サン・ピエトロ大聖堂

世界最小の独立国ヴァチカン市国は、ローマの中心を流れるテヴェレ川の西岸に位置している。その中心をなすのが、サンピエトロ大聖堂である。紀元324年に建立され、そ



の後、16世紀に再建工事がスタートしてから実に120年の歳月を費やして現在の建物が完成されたという。ローマの町の各所から遠望される巨大なクーポラ（大円蓋）は、建築家としてのミケランジェロの最高傑作である。

また、大聖堂前には、30万人を収容できる壮大なサン・ピエトロ広場が広がっている。毎週日曜正午には、法王の姿を拝謁することができるという。大理石の列柱回廊が広場を包み込むようであり、その上の140の聖人像が広場を見下ろしている。

私の目を引いたのが、警護にあたる門衛の姿である。ヴァチカンの警護はスイス兵によって行われているが、ミケランジェロがデザインしたとされる黄色と青のストライプのクラシックな制服は何ともオシャレであった。

### 大聖堂内部と聖なる光

さて、大聖堂の中は、荘厳な闇が支配している。一步足を踏み入れるが、その圧倒的な雰囲気足がすくむ思いがする。天蓋の窓からは、聖なる光が差し込み、目が慣れて来るに従って、絢爛たる巨匠たちの傑作に対峙する自分自身を感じてくる。写真の中央は、ベルニーニ作のバルダッキーノ（教皇の祭壇）。玉座の聖ペテロの銅像は、敬虔な信者たちの接吻と、私たち世界から訪れた旅人たちの触れる手によって、足の部分が擦り減ってしまっていた。

「ピエタ像」は入り口右の礼拝堂の中にある。ピエタとは憐憫や敬虔の意味を持つラテン語から発生したイタリア語で、キリストとその死を嘆く聖母マリアの姿を指す。

23歳のミケランジェロが制作したピエタは、小さいながらも、白く美しく高貴に輝いていた。死せる息子キリストを抱える聖母マリアの表情や筋肉や衣服の細密な描写の隅々にまで、「悲しみ」の根元が表現されていると思った。



ピエタ像

荘厳な闇支配する大聖堂プリズムのごと光の帯なす

悲しみの極みなるべしピエタ像礼拝堂に白く輝く

## ヴァチカン博物館

ヴァチカン博物館はサン・ピエトロ大聖堂に隣接しており、古代から現代までの優れた芸術作品を所蔵する世界最大の博物館である。歴代教皇たちの美術収集品を保存するために作られた27の美術館と博物館で構成されている。



### ヴァチカン美術館中庭からの風景

私たちは、朝8時前にヴァチカン博物館に行くが、すでに長蛇の列である。世界中から、人々が集まっている。英語・フランス語・ドイツ語・ラテン語が入り乱れている。1時間以上並んだが、人々の様子を見ているだけで興味があり、そう退屈はしなかった。

洪水のような人の波に流されながら、芸術作品の宝庫を探索するのもまた楽しである。ふと、このようなことを考えた。いまこの瞬間も世界の各地で紛争が絶えることがない。また、戦火の中で死に直面している人々も数知れない。しかし、世界の各地から巡礼のようにこのヴァチカンを訪れて平和を享受していることも事実なのである。いま私に出来ることは、悠久の歴史に身を任せて、その中で素直に感動して自分の感じたとを自分の言葉で伝えることではないのかと。

美しいレリーフに飾られた螺旋階段を登る。「燭台のギャラリー」「タペストリーのギャラリー」「地図のギャラリー」と絢爛たる美の殿堂を、ただただ感嘆して進んでいく。一つ一つが歴史的な価値を持つ芸術作品であるが、ゆっくりと足を止めることは出来ない。

### ラファエロの間

ここには、あの有名な「アテネの学堂」が飾られている。他の作品を圧倒する迫力である。プラトン、アリストテレス、ソクラテス、ピタゴラスなど古代ギリシャの偉人・哲学者が劇的に描き出されている。人類の英知を壮大に表現した、ヴァチカン芸術の中でも屈指の名作といわれる所以である。



「アテネの学堂」

完璧な遠近法の背景の中に描かれた画面中央の人物は、左がプラトン、右がアリストテレスである。議論をする二人のモデルは、レオナルド・ダ・ヴィンチ（プラトン）・ミケランジェロ（アリストテレス）であるとされている。

登場人物がそれぞれ議論したり、瞑想にふけったり、深い憂愁の中にいる。その中で、画面中央より少し右に立つ、黒い帽子をかぶり、じっとこちらを見つめている人物がいる。その人こそが、この絵の作者ラファエロ自身である。歴史を超越した深い眼差しである。

## システィーナ礼拝堂

### 天井画



システィーナ礼拝堂は、教皇を選出するコンクラーヴェ（ローマ教皇を選出する選挙システム。他国の干渉を防止し、秘密を保持するため練り上げられてきた）の会場として知られている。一步足を踏み入れると、人々がひしめき合っている。意外と狭い空間である。そして、一様に感嘆の声を上げたり、天井を指さして目を見開いている。

和辻哲郎は、「イタリア古寺巡礼」で次のように述べている。「最初に感じたことは、事実上、この堂が壁画や天井画のためにあるのであって、絵がお堂のためにあるのではないということであった。」まさしく、私たちは、礼拝堂に感嘆するのではなく、ミケランジェロに代表される一人の人間の持つ無限の可能性に驚嘆するのである。

500年前のヴァザーリの言葉は、現代の我々の姿を予言している。「礼拝堂の覆いが取り除かれると、世界中の人々があらゆる場所からやって来るのを感じた。この作品は人々を啞然とさせ、言葉を失わせるのに十分であった。」

天井画の中央部分は、9つの空間に構成されている。1 光と闇の分離 2 天体の創造 3 大地と水の分離 4 アダムの創造 5 エヴァの創造 6 原罪 7 ノアの燔祭 8 洪水 9 ノアの泥水。これらの場面は、人類の始まりと墮落、そして神との和解と未来の救済の約束を表現しているという。創世記の9つの物語が、頭の上から現実と幻が交錯するように降り注いでくるのである。

私にとって最も印象深かったのは、「アダムの創造」である。創造主がアダムに息吹を吹き込む瞬間がドラマチックに描かれている。指と指がいままさに触れようとする緊迫した場面が私の頭上で展開していたことを今のこのように思い起こしている。



さて、ミケランジェロはどのようにしてこの壮大な天井画を描いたのであろうか。はじめは、中空にぶら下がる台（天井に穴を開けた吊りベルト）であつたらしい。しかし結局は堂内に足場を組み、横になりながら制作したという。そして、助手の手際が気にいらず一人で作業を続けていったと伝えられている。

このように一般的な常識をはるかに越える情熱で描かれた天井画は、現在にいたるまで、熱狂的な共感と敬慕の念を引き起こしているのである。

## 最後の審判

「最後の審判」は、システィナ礼拝堂の正面に飾られた祭壇画である。天井画が完成してから約25年後（ミケランジェロ約60歳）に着手され、5年間の年月をかけて制作されたというミケランジェロ晩年の最高傑作である。



画面中央ではキリストが雲の玉座から立ち上がり、右手を振り上げて最後の審判を下そうとしている。傍らの聖母は、体をねじって顔をそむけている。上部では無翼の天使たちが飛翔しながら受難のシンボルを運んでいる。左では十字架、茨の冠、右ではむち打ちの円柱とはしごである。

キリストと聖母の周囲では聖人たちと選ばれた者たちが群れをなしてゆっくりと輪になっている。聖バルトロマイが持つ生皮は、ミケランジェロの自画像であるという。

下の段の中央ではラッパを吹く天使たちがいる。左の天使は善行の書を持ち、右の天使は悪行の書を持っている。つまり、左には復活して天に昇ろうとしている人々が描かれ、右では呪われた者たちを地獄へ墜落させている。さらに、翼を持った小舟から悪魔たちが呪われた者たちを降ろしている。

かのヴァザーリの次の言葉が、この祭壇画の本質を言い当てている。「彼（ミケランジェロ）は絵画に多くの努力を捧げ・・・ダンテの詩句《死者は死に、生者は生きているようだ》を実証したのである。この絵からは、呪われた者の悲惨と祝福された者の歓喜が伝わってくる。」これは、すべて人間の運命の最後の裁きの宣告が下される直前の瞬間なのである。

さて、「最後の審判」には最後に触れておかなばならないことがある。それは、ピウス5世による「身繕いする」命令である。つまり、「多数の裸体が描かれていて、破廉恥にも恥部をさらけ出している。はなはだしく不道徳であり、礼拝堂向きの作品ではない。」との指摘である。結局、聖人には不自然な形の覆い布が描き加えられ、聖女には衣服が描き加えられたのである。もちろんその作業に従事させられた画家たちに次のような言葉がささやかれたのは言うまでもない。「非常に凡庸な芸術家たちが、絵や天井の最も美しい裸体像を布でおおう仕事に携わっている。」

## さらばローマよ

ローマでは、近代的なホテル「ビスコンテ・パレス」で2連泊した。旅立ちの朝、妻と二人でサンタンジェロ城を巡り、テベレ川河畔を散歩した。遠くにはサンピエトロ大聖堂のクーポラが聳え立ち、石畳の歩道を歩きながら悠久のローマの歴史を体感していた。

そして、同時に木と紙の日本の文化を懐かしく思う自分を発見していた。



朝まだき妻と巡りし石畳サンタンジェロ城霧に現はる